

令和元年6月19日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03366

研究課題名(和文) 自発的協力、本源的動機及び社会環境の役割：理論とフィールドワークによる実証

研究課題名(英文) Voluntary cooperation, intrinsic motivation, and social environment: Theory and empirical analysis through fieldworks

研究代表者

柿中 真(Kakinaka, Makoto)

広島大学・国際協力研究科・教授

研究者番号：40421234

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：公共財供給など自発的協力問題において、各個人の本源的動機は各個人及び社会全体の自発的協力行動を決定する上で重要である。しかし、その役割は地理的・信教的・歴史的背景や都市・農村など人々が直面する社会環境に大きく依存している。本研究では、人々を取り巻く社会環境と倫理的動機・社会的動機等から成る本源的動機の関係性を考慮した上で、社会環境が本源的動機及び自発的協力行動にどのように影響を及ぼすのかについて、実験やサーベイ調査等フィールドワークを通じて理論的かつ実証的に分析を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自発的協力に関する研究の中で、本源的動機と社会環境の役割を体系的に検証した論文は少ない。そのため、本研究の理論課題では、本源的動機及び様々な社会環境の役割を明示的に導入し、自発的協力に関して理論的議論を試みた。また、本研究の実証課題では、現存する自発的協力問題に関して、現地でのフィールド実験やサーベイ調査を実施し実証的に分析し、実際の社会環境と本源的動機の関係性を明らかにすることができた。理論分析に加えて、現地での社会調査等を通じた実証分析を行うことによって、人々を取り巻く社会環境に適した自発的協力促進に資する有効な政策のあり方を提唱でき、この点においても、学術的・社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：Individuals' intrinsic motivation plays a crucial role in determining their behavior related to voluntary cooperation. One crucial issue is that their intrinsic motivation and behavior depend on social environments, such as geographical and historical backgrounds. This project has theoretically and empirically discussed how social environments relate to people's voluntary cooperation with the consideration of the roles of intrinsic motivation.

研究分野：公共経済学

キーワード：自発的協力 社会環境 本源的価値 社会協力 フィールドワーク

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

天然資源枯渇など様々な環境・資源問題において、社会構成員による自発的協力及びそれを促す有効な政策遂行は、それら諸問題を解決する上で必要不可欠である。自発的協力は、利己的動機のみならず、社会心理学者により提唱された個人の内面にある本源的動機(intrinsic motivation)に大きく依存している。本源的動機は Kantian /Fairness 型分類 (Elster 1989) など様々な分類法が提唱されている。ここで重要な論点は、本源的動機の違いが自発的協力に対する態度ひいては各種政策の自発的協力に対する効果に決定的な違いをもたらすということである(Le Grande 2003)。Kakinaka & Kotani (2011,2014)は、本源的動機を(1)社会的貢献という行為自体に伴う個人的な感情に起因する倫理的(moral)動機と(2)社会的相互行為に起因する評判など社会的(social)動機の二つに分類し、その各々の本源的動機を外生的に所与として、自発的協力に与える影響及び政策の有効性を理論的に議論している。

しかし、資源・環境問題など現実の自発的協力問題を考える際、人々の本源的動機が倫理的または社会的動機などどのような動機なのかを特定化する必要があるが、それは彼らを取り巻く社会環境に大きく依存していると想定される。ここでの社会環境は、地域固有の信条・宗教的背景や歴史的慣習や災害地等地理的背景など人々を取り囲む様々な諸条件が含まれる。先行研究では特定の本源的動機を所与と扱い、その社会環境への依存性・特異性を十分に考慮していない。よって、各々の社会環境でどのような本源的動機を人々が抱いているのか特定化することができず、ひいては自発的協力を促進する具体的かつ有効な政策を打ち出すことが困難となっている。現実の自発的協力問題において、人々を取り巻く社会環境と本源的動機の関係性を十分に考慮していないことこそが、Le Grande(2003)が主張しているように、税・補助金など既存政策の実際的な効果が期待に反した結果をもたらし、政策効果に対する疑問が持たれる原因であると考えられる。

利他的動機等本源的動機を伴う経済モデルを基に公共財供給など自発的協力の解明及び様々な政策効果の検証を試みている研究は少なからず存在する(Andreoni 1988,1990; Hollander 1990; Brekke et al 2003)。現実の自発的協力を議論する際、人々を取り巻く社会環境と本源的動機・自発的協力との関連性が重要である。しかし、社会環境の一例である宗教的背景と自発的協力との関係(Tan & Vogel 2008; Anderson & Mellor 2009)を考察した研究など一部あるものの、実際の社会環境と自発的協力の関係性に関する総括的な研究は非常に少なく、未解決の課題が山積している。その課題解決には社会環境の役割を理論・実証研究において明示的に考慮する必要がある。そのため、フィールドワーク(実験やサーベイ調査等)の実施が必要不可欠となる。また、倫理的・社会的動機といった全く異なる本源的動機が心理学など他分野で提唱され、経済学分野においても人間心理の本質である本源的動機が重要視されつつあるにもかかわらず、倫理的・社会的といった異なる本源的動機と自発的協力との相互関係を包括的に議論した研究も未だに少ない。そのため、本研究は、フィールドワーク(実験やサーベイ調査等)を行うことによって、人々を取り巻く社会環境と倫理的・社会的本源的動機との関係性を体系化し、それらの関係性がどのように自発的協力行動に影響するのか、また、自発的協力を促す有効な政策のあり方を理論的・実証的に議論する。

### 2. 研究の目的

公共財供給など様々な自発的協力問題において、各個人の本源的動機は各個人及び社会全体の自発的協力行動を決定する上で重要である。しかし、その役割は人々が直面する社会環境(災害地等地理的背景、地域の信条・宗教的背景や歴史的慣習、都市・農村等)に大きく依存している。本研究では、人々を取り巻く社会環境と倫理的動機・社会的動機等から成る本源的動機との関係性を考慮した経済理論モデルを基に、社会環境が本源的動機及び自発的協力行動にどのように影響を及ぼすのかについて、フィールドワーク(実験やサーベイ調査等)を通じて理論的かつ実証的に分析する。本研究では、異なる社会環境で自発的協力を促す本源的動機を特定化・比較検証することによって、社会厚生上、各々の社会環境に適した効率的な政策を提唱することができる。

### 3. 研究の方法

(1)[社会環境と本源的動機との関係性の体系化・分類化]公共経済学や社会心理学など関連分野の先行研究をレビューした上で、倫理的動機や社会的動機など様々な本源的動機が存在に留意しつつ、地理的背景、信条・宗教的背景、歴史的慣習等人々が直面する社会環境と自発的協力に影響を与える様々な本源的動機との関係性を経済学視点から体系化・分類化する。

(2)[理論研究:社会環境と本源的動機を考慮した経済モデルの構築・理論分析]人々が直面する社会環境は本源的動機の形成に影響を与えていると考えられるため、社会環境の異質性が本源的動機及び自発的協力行動に与える影響を理論的に考察する。具体的には、上記(1)の分類化した社会環境と本源的動機(倫理的動機と社会的動機等)との関係性を基に、異質な社会環境を明示的に組み入れた本源的動機と自発的協力に関する経済理論モデルを構築する。各々の地域において特徴ある社会環境が人々の本源的動機及び自発的協力行動に与える影響を分析し、自発的協力の促進する諸政策の理論的帰結及び最適政策とその政策含意の導出を試みる。

(3)[実証研究]上記(2)理論研究の経済理論モデルから導出された理論的結果の妥当性を実証検証する。実際の社会環境の役割を捉えるために、現地でフィールド実験やサーベイ調査、経

済実験を実施する。アジア諸国を中心とした複数の国・地域においてフィールドワークを実施することにより、様々な社会環境下で、本源的動機の特定化・自発的協力を促す有効な政策の導出が可能となるのみならず、社会環境の異質性と本源的動機・自発的協力行動との関連性を体系化・一般化できると見込まれる。

#### 4. 研究成果

公共財供給など自発的協力問題において、各個人の本源的動機は各個人及び社会全体の自発的協力行動を決定する上で重要である。しかし、その役割は地理的・信教的・歴史的背景や都市・農村など人々が直面する社会環境に大きく依存している。本研究では、人々を取り巻く社会環境と倫理的動機・社会的動機等から成る本源的動機の関係性を考慮した経済理論モデルを基に、社会環境が本源的動機及び自発的協力行動にどのように影響を及ぼすのかについて、実験やサーベイ調査等フィールドワークを通じて理論的かつ実証的に分析することである。

実証研究としては、まず、社会環境が本源的動機及びそれに伴う協力行動に与える影響を分析することを目的として、バングラデシュの社会環境の異なる3地域 (Capitalistic, Transitional, Rural Regions) において、社会フィールド調査を実施し、データを集めて実証分析を行った。社会環境の違い (特に資本主義・競争的な社会環境と協力的な社会環境に着目した形で) が本源的動機及びそれに伴う協力行動に与える影響を分析した。社会がより競争的になるに従い、人々はより社会的に協力的ではなくなるという実証結果が得られた。持続的社會を保つために、人々の協力行動が必要となるが、本結果は、現代社会が競争的になるにつれ、社会経済の持続性を損なってしまうという危険性を提唱した内容となった。本実証研究の成果を「Social value orientation and capitalism in societies」に纏め、海外英文専門雑誌 (PLOS ONE) に出版した。また、バングラデシュで実施した社会フィールド調査で得られたデータを基に、宗教的及び非宗教的協力活動に着目しつつ社会環境の違いが本源的動機及びそれに伴う協力行動に与える影響を議論した。当該研究では、人々にとって宗教的及び非宗教的協力活動は補完的ではなく代替的であることが示された。現代社会においては、非宗教的もしくはボランティアなど一般的な社会協力活動が社会経済活動の持続性に必要不可欠である。そのことを考慮すれば、宗教意識が高いことが必ずしも社会協力活動が盛んになるとは限らないことを示唆している。本実証研究の成果を纏めた論文「Religiosity may not be a panacea: Importance of prosociality to maintain humanitarian donations」はワーキングペーパーとして発表した後、海外英文専門雑誌に投稿し、現在審査中である。

さらに、人々のコミュニティ活動への自発的参加・協力が農村開発に必要不可欠なソーシャルキャピタルに影響を与える効果を実証研究するために、スリランカの農村地域にて社会フィールド調査を実施した。スリランカでは政府主導で Village Development Program (VDP) を推進し、農村地域におけるコミュニティ活動の活性化及び社会経済資本の充実化を図っている。当該研究では、人々が VDP に参加すればソーシャルキャピタルが増加することが示された。このことは、政府主導の地域参加型プログラムが人々を取り巻く社会環境を通じて農村地域の発展に寄与する可能性を示している。本実証研究の成果を纏めた論文「Personal social capital and voluntary participation in the Village Development Program in rural Sri Lanka」は、現在、海外英文専門雑誌に投稿し審査中である。さらなる実証研究として、税の法令順守を自発的協力問題として捉えた上で、インドネシアでフィールド調査・実験を実施し、どのような社会環境の人々が法令順守をしているのかについて特定化した。現在、実証結果を「Tax compliance and social desirability bias of taxpayers: Experimental evidence from Jakarta, Indonesia」として取り纏め中であり、31年度中に海外英文専門雑誌に投稿する予定である。また、理論研究においては、これまでの実証分析で得られた結果を考慮しつつ、社会環境の違いがどのような本源的動機に影響を及ぼし、ひいては、自発的協力行動を決定づけるのかを包括的に議論するための経済モデルの構築を試みており、今後も継続して研究する予定である。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

Shibly Shahrier, Koji Kotani, Makoto Kakinaka. Social Value Orientation and Capitalism in Societies. PLOS ONE 11(10), e0165067, 2016. 査読有

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<https://researchmap.jp/read0141105/>

〔ワーキングペーパー〕(計 1 件)

Shibly Shahrier, Koji Kotani, Makoto Kakinaka. Religiosity may not be a panacea: Importance of prosociality to maintain humanitarian donations. Social Design Engineering Series, SDES-2017-23, 2017.

〔Mimeo〕(計 2 件)

Niranjala Hulugalla, Kyohei Yamada, Makoto Kakinaka. Personal social capital and voluntary participation in the Village Development Program in rural Sri Lanka. 2018.

Endra Iraman, Yoshikuni Ono, Makoto Kakinaka. Tax compliance and social desirability bias of taxpayers: Experimental evidence from Jakarta, Indonesia. 2019.

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：小谷 浩示

ローマ字氏名： Koji Kotani

所属研究機関名：高知工科大学

部局名：経済・マネジメント学群

職名：教授

研究者番号（8桁）：80422583

研究分担者氏名：山田 恭平

ローマ字氏名： Kyohei Yamada

所属研究機関名：立教大学

部局名：経営学部

職名：特任准教授

研究者番号（8桁）：60710605

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。